



祝！ICT Monthly 第100号発行

感染制御部 部長 白倉良太

TITLE

1996年8月にICT Monthly 第1号が発行されてまる8年が過ぎ、第100号を発刊することになりました。1995年秋、ICT発足準備会が立ち上がり、1996年初頭ボランティアチームが“誕生”しました。そして2月の病院運営委員会で感染症対策実施小委員会が病院の防疫対策委員会のもとに作られ、漸く“認知”されたわけですが、その経緯とその時のメンバーがICT Monthly第1号に紹介されています。〔写真は当時のメンバーです〕

1996年8月というと、O157のアウトブレイクで大阪中が大騒ぎのときで、第2号とともに「特別号外」が発行されたし、第3号までO157関連の記事で埋め尽くされました。発刊早々、大変タイムリーな記事を連載したことで、最初から大変注目をいただき、その後も谷池雅子編集委員長の奮闘の甲斐あり、タイムリーで魅力ある特集記事が掲載され続けたことは皆様ご存知の通りです。また、臨床検査部から参加の浅利誠志小委員会副委員長、後に阪大最初のICNとしてデビューすることになる上田博美婦長などが、次々に執筆者兼編者として参入し、魅力ある月刊紙へと発展しました。

1998年3月、「感染症対策部に関する申し合わせ」により院内措置ながら「感染対策部」が設置されました。対策部の部屋もあてがわれ（それまでは、臨床検査部の部長室に間借

りしていた）、「よちよち歩き”をはじめました。

2001年4月から「教育・研究・運営等の中期目標推進計画」の強化目標のひとつにとりあげられ、名実ともに中央診療施設のひとつとして再スタートすることになりました。感染対策の体制強化、システムの見直しがなされ、パワーアップすることになったのであります。具体的には

- ・ 病院長直轄のコアメンバーから成る「院内感染対策委員会」を新設、決定権を与え、管理上の機動力をもたせた
- ・ 院内措置で専任者（ICD, ICN, ICP）を配置し、中央診療施設として強化
- ・ 部内に「運営部会」と「感染対策実務委員会」を置き、権限・責務を明確にした

というものでした。（詳細は本紙56号参照）

2002年には炭疽菌による生物テロ事件に関する記事が本紙をにぎわしました。2003年春はSARSの大流行で、ICTはその対策でてんでこ舞いでした。その最中の、2003年4月、「感染制御部」が設置され、現在に至っています。部長の私と、検査部門担当の浅利副部長は兼任で残りましたが、他のICTメンバーは、企画委員会委員となり、制御部のブレインとして指導にあたることになりました。そして、専任のICDとして朝野副部長が、



裏に続きます。



専任の I C Nとして鍋谷師長が（正式には 2004.4.付け）、専任の I C Pとして下嶋さんが就任しました。

この間、本業（小児科診療局長就任）が忙しくなった谷池編集長から、本紙編集事務は近藤綾さんに引き継がれました。近藤さんは C Gを得意とし、感染対策部の H Pの維持、管理をする傍ら、本紙の編集、講習会のポスターのデザインなど一手に引き受けてこられ、大変お世話になりました。（過去形にしたのは、実は本年末をもって退職され主婦に専念される？ことになり、100号の編集が最後のお仕事となったからであります。）

そのようなわけで、本紙の執筆者も大々的に入れ替わることになったのですが、ますます“色っぽく！？〔カラー版になっただけ〕”ますます充実した内容になったように思います。多分、今年7月に専任の I C Dとなった橋本先生が今後新風を吹き込んでくれるものと期待しているところです。
